GM 鶴牧-3 環の会

第 43 回クラシックを楽しむ会

2017 年 5 月 21 日（日）18:00～（2 時間 6 分、休憩除く）

タイトル：**歌劇「マノン・レスコー」（プッチーニ）**

会場等　：ミラノ・スカラ座
　　1998 年 6 月 11 日
楽団等　：ミラノ・スカラ座管弦楽団、同合唱団
指揮　　：リッカルド・ムーティ
演出　　：リリアーナ・カヴァーニ
出演　　：マリア・グレギーナ（マノン・レスコー）
　　ホセ・クーラ（デ・グリュー）
　　ルーチョ・ガッロ（レスコー）
　　ルイージ・ローニ
　　（ジェロンテ・ド・ラヴォワール）
　　マルコ・ベルティ（エドモンド）
　　オラツィオ・モーリ（旅籠の主人）
　　マリオ・ボロニェージ（舞踏教師）
　　グローリア・バンディテッリ（音楽家）
　　エルネスト・ガヴァッツィ（街灯点灯夫）
　　他

第 4 幕最終場、荒野で絶命するマノンに慟哭するデ・クリュー

マリア・グレギーナとホセ・クーラ

あらすじ

青年騎士デ・グリューは修道院に入ることになっていた美少女マノンに一目ぼれしパリに駆け落ちする。貧乏暮らしが嫌になったマノンは財務官ジェロンテに囲われるが愛のない生活に虚しさを感じている。そこにデ・グリューが現れ愛を確かめ合っているところをジェロンテに見つかる。マノンは訴えられて流罪になる。流刑地アメリカに渡った二人。荒野をさまよった末にマノンはデ・グリューの腕に抱かれて息絶える。

見どころ聴きどころ

第 1 幕でデ・グリューがマノンに一目ぼれして歌うアリア**「見たこともない美人！」**、第 2 幕でジェロンテに囲わたマノンが愛のない日々を嘆いて歌うアリア**「このやわらかいレースに包まれても」**、第 3 幕でデ・グリューが船長に乗船を懇願して歌うアリア**「ご覧ください、私は狂っています」**そして、第 4 幕の荒野でマノンが絶望のなか死期を悟って歌うアリア**「ひとり侘しく」**が有名。

第 3 幕間奏曲は二人の切ない気持ちと愛の回想を表現していて単独でも演奏される名曲。

第 44 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：**歌劇「セビリアの理髪師」（ロッシーニ）**

6 月 18 日（日） 17 時 30 分開場、18 時上映開始

2016 年グラインドボーン音楽祭。人気ソプラノ、ダニエル・ドゥ・ニースの明るく茶目っ気あふれるロジーナをお楽しみに。なお、演出は女優・演出家のアナベル・アーデン。

7 月「アンドレア・シェニエ」、8 月以降「トゥーランドット」、「チャルダッシュの女王」など予定。

あらすじ

【時と場所】

18 世紀フランス（アミアン、パリ、ル・アーヴル）およびアメリカ・ルイジアナ（ニューオーリンズ近郊の荒野）。

【主要人物】

マノン・レスコー（ソプラノ）	修道院に向かう途中、デ・グリューと駆け落ちする
レスコー（バリトン）	近衛軍曹でマノン・レスコーの兄、遊び人
騎士デ・グリュー（テノール）	学生、マノンに一目ぼれ
ジェロンテ・デ・ラヴォワール（バス）	老財務官、金満家
エドモント（テノール）	学生、デ・グリューの友人

【第 1 幕】アミアン*1 の旅籠前の広場

エドモントら学生と娘たちが青春を謳歌しているが青年騎士デ・グリューは娘たちには関心がない。駅馬車が到着し、降りてきた美貌のマノンと言葉を交わしたデ・グリューは一目惚れしアリア**「見たこともない美人！」**を歌う。マノンは父親の意向で修道院に入るため兄のレスコーに付き添われていた。同じ馬車から降り立った好色の老財務官ジェロンテがマノン誘拐を企んでいた。これを知ったデ・グリューはマノンに愛を告白して駆け落ちしようと説得、エドモントら友人の協力を得てパリを目指して出発。地団太を踏むジェロンテを金蔓とみた兄レスコーは「2 人はパリで見つかるでしょう」を示唆を与える。

【第 2 幕】パリ*2 のジェロンテの屋敷のマノンの部屋

マノンとデ・グリューはパリで見つかり、マノンはデ・グリューとの貧乏生活に見切りをつけてジェロンテの妾になっている。豪奢だか愛のない空しい日々を、訪ねてきた兄レスコーに名アリア**「このやわらかいレースに包まれても」**を歌い初恋のデ・グリューを懐かしむ。マノンに捨てられたデ・グリューはマノンを取り戻すためレスコーの手ほどきでいかさま博打にのめり込んでいたのだ。密かに現れたデ・グリューと愛を確かめ合っている所にジェロンテが現れたが、マノンに老醜と侮辱され、怒りを露わに出ていく。デ・グリューは一刻も早く逃げようとマノンを急かすが、宝石に未練のマノンにイライラしてアリア**「ああマノン、君の愚かな考えが僕を裏切るのだ」**を歌う。ジェロンテが警吏を連れて戻りマノンは連行される。デ・グリューは悲痛な声で「私のマノン！」と叫ぶ。

第 3 幕間奏曲（絶望の中、二人の切ない気持ちと愛の回想を甘美に）

【第 3 幕】ル・アーヴル*3 の港

マノンは国外追放となり、アメリカに送られる女囚を収容する獄舎に入れらている。デ・グリューとレスコーはマノン救出を試みるが失敗する。女囚たちを流刑船に乗せるための点呼が始まりマノンも呼ばれる。女囚たちに罵声をあびせる見物の群集に、デ・グリューはいても立ってもいられなくなり、船長に自分も連れていってくれと涙ながらに懇願してアリア**「ご覧ください、私は狂っています」**を歌う。感動した船長はデ・グリューの乗船を許す。

【第 4 幕】ニューオーリンズ近郊、ルイジアナ*4 の荒野にて

植民地ルイジアナのニューオーリンズでもマノンとデ・グリューは問題を起こし、ニューオーリンズから逃げ出して荒野をさまよう。デ・グリューは動けなくなったマノンを残して水を探しに行く。飢えと渇きに衰弱したマノンは自らの死期を悟り感動的なアリア**「ひとり侘しく」**を歌う。何も見つけられず戻ってきたデ・グリューにマノンは「あなたをとても愛しています！…私の愛は…死なない…」彼の腕に抱かれて息絶える。

注釈.

***1. アミアン**はパリの北 100km にある北のヴェネツィアと称される地方都市。フランス新大統領マクロンの出身地。

***2.** プッチーニの台本では（小説と異なり）二人が駆け落ち後、マノンがパリで囲われ者になるまでの経緯をカットしている。

***3. ル・アーヴ**ルは大西洋セーヌ川河口の港湾都市。第 2 次世界大戦のノルマンジー上陸作戦に続き英国空軍が徹底的に破壊。戦後都市再建されユネスコ世界遺産に登録。新大統領から首相に指名されたフィリップ国民議会議員は現ル・アーヴル市長。

***4. ルイジアナ**はルイ 14 世の時代にフランス植民地になり、小説の舞台となった 18 世紀前半の時代まではミシシッピ川流域全体を指す広大でほとんどが未開の荒野だった。現在の米国ルイジアナ州を含むほぼ 14 州を含んでいた。

主な出演者

マリア・グレギーナ（1959 - ）

マリア・グレギーナ

ウクライナ・オデッサ生まれのソプラノ歌手。5 歳からピアノを学び、バレリーナを志望してダンス学校へ、声楽は 11 歳から習い始める。1990 年前後から世界の主要歌劇場にデビュー。本公演の第 2 幕ではマノンがメヌエットを踊るバレエの場面の優雅な姿も。

声の威力と知的な演技に定評がありメトロポリタン歌劇場 2001 年「ナブッコ」のアビガイッレなどヴェルデイの諸役で賞賛。

ホセ・クーラ（1962 - ）

ホセ・クーラ

アルゼンチン・ロサリオ生まれのテノール歌手。15 歳で合唱指揮者デビュー、大学でも本来の志望だった指揮、作曲を専攻。本公演は「ポスト・3 大テノール」の筆頭と言われた絶頂期の公演。近年は歌手中心の活動から、オペラ指揮者、演出家、オペラなどの作曲に軸足を移しつつある。

本公演前のインタビューで「プッチーニのリリックテノールの役柄のなかで、最も長く、おそらく最も要求がきびしい―5 つの曲と大きいデュエットがある。マノン・レスコーの後、あらゆるオペラは、テノールのための子守り歌になる。それほどタフだ」と語っている。

マルコ・ベルティ(1962 - ）

マルコ・ベルティ

イタリア・コモ生まれ。ミラノ・スカラ座デビューは 1992 年、ロリン・マゼール指揮で本公演と同じ「マノン・レスコー」のエドモント役でジーノ・キリコと共演した。現在も世界的に活躍、鑑賞会ではサン・カルロ劇場 2014 年「オテロ」のタイトル・ロールを務めた。

リッカルド・ムーティ（1941 - ）

リッカルド・ムーティ

イタリア・ナポリ生まれ。クラウディオ・アバドの後任として 86 年にミラノ・スカラ座の音楽監督に就任、翌 87 年にはスカラ座管弦楽団の首席指揮者にも就任して長年にわたりスカラ座の名舞台を数多く作り上げた。2005 年にムーティがスカラ座総支配人を罷免したため、スカラ座管弦楽団員と職員の圧倒的多数により不信任となりスカラ座の職を辞任した。現代を代表する巨匠である。

生涯プッチーニの作品を指揮しなかったクラウディオ・アバド(1933 - 2014)とは一時期不仲が伝えられたがその後は互いに尊敬し合う仲となっていた。

リリアーナ・カヴァーニ(1933 - ）

リリアーナ・カヴァーニ

イタリア・モデナ近郊出身の女性映画監督・脚本家・演出家。巨匠ヴィスコンティに傾倒し助監督を務めた。彼女が監督した映画**「愛の嵐」**(1973 年)は世界的に大ヒットした。演出家としてムーティとは本公演以外にも「椿姫」、「カヴァレリア・ルスティカーナ」、「仮面舞踏会」などの舞台を演出した。*右の写真は 1966 年デビュー当時のもの？

余談. 主人公の年齢について

デ・クリューは 17 歳。マノンは（マスネの歌劇「マノン」の通り）多分 15 歳。アベ・プレヴォの原作で、デ・クリューが『私は 17 歳であった。…私の両親が、私を遊学させたアミアンで私は哲学の課業を終了した。』、そしてマノンについて『彼女はまだ私よりは年下であったが…』私の挨拶を受け入れた。私は思いを語った。『なぜなら彼女は私よりも遥かにませてもいたのだから。』（河盛好蔵）と語っている。

プッチーニの台本では兄のレスコーがマノンについて『…お察しください!（マノンは）まだ 18 歳で…』とジェロンテに語っているがデ・グリューの年齢はでてこない。